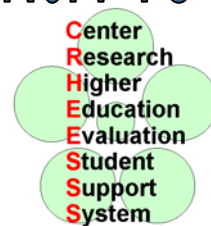


週刊センターニュース No.146



第146号(2007年2月19日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

大学評価研究会のご案内

テーマ: 「学生支援と大学評価指標」

趣旨: 研究課題名「大学評価指標における学生支援の位置づけに関する実証的研究」(基盤(c)課題番号18611004、研究代表者 青野 透)の調査・研究の一環として、各認証評価機関からの講師による講演を行い、その後、認証評価指標における学生支援の位置づけについて議論する。

第8回大学評価研究会

日時: 2007年2月23日(金) 16時30分~18時

場所: 角間キャンパス総合教育棟2階大会議室

講師: 前田早苗(大学基準協会 大学評価・研究部部长)

第4回大学教育セミナーのご案内

当センターでは、本セミナーをFDの一環として位置づけ開催して参りましたが、今回は「GPAと厳格な成績評価 - 学士課程教育の実質化に向けて -」をテーマとしました。今年4月からは、大学院設置基準の改正に伴い大学院におけるFDが義務化され、さらにその動きは学士課程教育にも及ぼうとしており、各大学にとって全学的なFD組織化が共通の課題となっています。

特に「厳格な成績評価」は大学教育改革の根幹をなす課題であり、多くの大学で議論が進んでいますが、全学的取組として組織化するためには、文系、理系にわたる多様な授業において適切な成績評価基準をいかに設定するか、などさらに検討すべき基本的問題が残されています。

本セミナーでは、以下の通り成績評価のご研究で著名なお二人の講師をお招きし、成績評価の原理、現状と問題点等について提言していただきます。また本学薬学部、工学部における成績評価の先行事例を紹介していただき、今後の成績評価の問題点について議論する予定です。

是非ともご出席いただきますようお願いいたします。

テーマ: 「GPAと厳格な成績評価 - 学士課程教育の実質化に向けて -」

主催: 金沢大学 大学教育開発・支援センター

共催: 金沢大学文学部FD委員会、経済学部カリキュラム委員会、人間社会環境研究科FD委員会

日時: 平成19年2月22日(木) 13時30分~17時30分

会場: 金沢大学 角間キャンパス総合教育棟 D10講義室

(金沢大学セミナー会場から富山大学、福井大学、北陸先端科学技術大学院大学に双方向遠隔授業システムを用いて配信します。)

プログラム:

開会の挨拶 鹿野勝彦(金沢大学副学長・教育担当理事)

講演(13:35-15:35)

館 昭(桜美林大学大学院教授)「学士課程の意義と個々の授業、そして成績評価」

半田 智久(静岡大学大学教育センター教授)「ユニバーサルなものにはユニバーサルに:
基幹システムとしてのfGPAとUDexへの方向性」

シンポジウム(15:45-17:30)

報告 向 智里(自然科学研究科教授)「薬学部におけるGPAの活用について」

山崎 光悦(自然科学研究科教授)「工学部のGPAの導入と活用状況」

議論 シンポジスト: 上記4名、木越 治(金沢大学文学部教授)

情報交換会(18:00-19:30)

(申込方法) 2月19日(月)までに西山まで(nnishiya@ge.kanazawa-u.ac.jp)申し込んでください。情報交換会を18時より金沢大学角間キャンパス生協南福利喫茶部にて会費3000円で行いますので、参加ご希望の場合は、合わせてお申込ください。

メディア教育開発センター研修講座

「ICTを活用したはじめての聴覚障害学生支援」参加報告

2006年12月15日(金)に日本財団(東京都港区赤坂)で開催された標記研修講座に参加した。本研修講座は、筑波技術大学及び日本聴覚障害学生教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)との共催であり、「障害学生支援コーディネーター育成FD研修会」という副題がつくものであった。午前10時から午後5時15分までの間に6名の報告およびそれに対する質疑応答が行われた。手話通訳、PC要約筆記も用意された情報保障環境の中、実際に何名かの障害者の参加もあった。6名の報告の中から、今回は、早稲田大学での支援活動について紹介させていただく。

早稲田大学では、早稲田大学障害学生支援室コーディネーターである岡田さんが中心となって聴覚障害学生支援活動を行っている。具体的な支援としては、手話通訳、手話通訳+ノートテイク(記録)、ノートテイク、ノートテイク(記録)の4種類の支援方法が用意され、6名の聴覚障害のある学生に対して、学生からの要望、講義内容に応じて適切なものが選択されている。ここで、ノートテイク(記録)について少し説明する。これは、学生が普通に授業を受けた場合に作成するノートに近く、講義内容をなるべく曖昧な点が無いようにノートにまとめる作業のことである。90分の授業を一人で担当する。手話通訳では、支援を受ける学生がノートを取りにくいいため、基本的には手話通訳との併用となる。

支援学生募集の流れとしては、先ず始めに、支援者募集の前に、当該学生と面談を行い、コミュニケーション手段、聴力の程度、支援の経験等を把握し、それに基づき適切な支援手段を決定する。次に、学内ポータルサイト、掲示、ボランティアセンターメーリングリスト、教員の紹介、口コミ等を使って支援者を募集する。募集にあたっては、支援が必要授業回数等を考慮し、必要人数を予め設定しておく。募集が終わると、養成講座を開催する。例えば、入門編の養成講座は、一コマ90分×3回で設定され、4、5月、10、11月にはそれぞれ4日間、11、12月には6日間にわたって開催され、講座を受講する学生が自分の都合のいい日に受けられるようになっている。養成講座の後、支援する学生の登録となるが、登録証には、その学生の履修外国語、得意分野を記載する欄が設けてある。また、実際の活動では、日時、ノートテイクおよび支援を受ける学生のサインの他に、文字の大きさ、見やすい位置に紙を置いていたかどうか、略字・略号を適切に使用していたかどうか、指示語を具体的に表記しているかどうかなど15項目にわたるノートテイクについての自己点検表や教員、授業形態へのコメント欄まである活動報告書が用意されている。これらの日常活動からのフィードバックが大きな意味を持つとのことであった。フィードバックという点では、ノートテイクを集めての懇談会も開催されている。

これらの体制は、障害学生支援室という常設の部署があってこそ成り立つものであり、大学の規模が大きいとは言え、こういう部署を設けられる早稲田大学が羨ましく思えた。金沢大学でも3年前に聴覚障害を持つ学生が入学し、急遽、ノートテイクを初めとする支援体制を整えた。また、全学的な障害学生支援委員会も設けられたが、金沢大学での支援体制は、支援してくれる学生、学務係、学生支援係など現場の個人的努力に頼る面が大きく、今後の問題としては、その学生が卒業してしまった後は、今回のノウハウが失われ、次に支援を必要とする学生が入学してきた時には、また一からあたふたと支援体制を構築することになる可能性が高いことである。専任の職員を配置する常設の部署を設けることは難しいかもしれないが、支援を必要とする学生がいない場合でも、定期的にノートテイク養成講習会の開催を初めとする活動を続けて欲しいと願うのは、金沢大学では贅沢なのであろうか。

(文責 教育支援システム研究部門 堀井祐介)